住んでいてよかったと思えるまち・大和

多様性が生み出す魅力とは

今年の市長新春対談は、東京農業大学名誉教授・元学長の進士五十八さんをお迎えしました。緑や子育て、人とのつながりなど、さまざまな切り口から人口減少時代でも選ばれるまちのあり方について語り合っていただきました。

※感染症対策を徹底したうえで、実施しています。

住んでよし 訪れてよしの まちづくり

大木 進士先生は農学、造園学、環境計画学など幅広い分野でご活躍をされています。そして長年大和市にお住まいで、市の仕事にもいろいろと関わっていただいていますが、進士先生からごらんになって、大和市はどんなまちでしょうか。

進士 はい、すごくいいまちですよ。昨年の「やまとニュース」を読みましたが、大和市のシニア支援の実績がすごい。事業数をカウントしました。100以上あったことに驚きましたね。「住んでいてよかったと、思われるまちへ」とスローガンがあって、ずばりこれだと思いました。住んでよし、訪れてよしのまちづくりというのは、小泉内閣の頃の「観光立国宣言」ですが、住んでいる人にもいいし、訪れる人にもいいのが本当のまちづくりだという思想ですね。

昔、小田急が江ノ島線を通すときに考えたのが江の島に行く観光路線でした。夏や正月はいいが、普段はガラガラだと困る。そこで、その中間に林間都市構想百万坪の住宅地整備を始めたわけです。南林間都市駅はほぼ概成し、中央林間都市駅は半分くらいで戦時体制になってしまった。しかし、大和は近代都市計画史に残るブランド都市ですよ。私は後に日本都市計画学会長もやりましたが、27歳のとき、それに憧れて結婚と同時に大和市に住みました。当時の南林間駅は、昔の軽井沢の駅みたいに洋風のかわいい玉石を積んだ木造の駅でした。のどかな場所で、本当に林間の宅地でした。クヌギやコナラの落葉樹にアカマツが点在して、芝生畑もところどころにありました。それから文教都市のイメージもありまし